

2022 年 6 月 27 日

学校法人三幸学園
東京未来大学福祉保育専門学校
校長 菅井 健治 殿

学校関係者評価委員会
委員長 松縄 和彦

学校関係者評価委員会実施報告

2021 年度学校関係者評価について、下記のとおり評価結果を報告します。

記

1 学校関係者評価委員

- ① 松縄 和彦 (社会福祉法人三幸福社会 理事)
- ② 上原 千晶 (ぼけっとランド綾瀬 園長)
- ③ 平井 宏子 (SANKO 日本語学校 教務課長)
- ④ 堤 隆太 (飛鳥未来高等学校綾瀬キャンパス キャンパス長)
- ⑤ 斉藤 幸枝 (東京未来大学みらいフリースクール スクール長)
- ⑥ 島内 未来 (東京未来大学福祉保育専門学校 第 6 期卒業生)
- ⑦ 谷山 萌香 (東京未来大学福祉保育専門学校 第 6 期卒業生)

2 学校関係者評価委員会の開催状況

2022 年 6 月 14 日 (会場 東京未来大学福祉保育専門学校 207 教室)

3 学校関係者委員会報告

以下「自己評価・学校関係者評価報告書」に学校関係者評価委員会コメントとして記載

以上

2021 年度 学校法人 三幸学園 東京未来大学福祉保育専門学校 自己評価及び学校関係者評価報告書

自己評価報告責任者：副校長 小平 香織

学校関係者評価報告責任者：学校関係者評価委員会委員長 松縄 和彦

1. 学校の教育目標

学園のビジョン「人を活かし、日本をそして世界を明るく元気にする」、ミッション「人を活かし、困難を希望に変える」のもと、福祉保育分野の学校として「福祉・保育現場に貢献することで、日本を明るく元気にする」というビジョンを掲げている。

また「技能と心の調和」を教育理念とし「素直な心、感謝の気持ち、高い意欲を持ち続け、自ら考え、自ら行動することで、社会に貢献する人材」、福祉保育分野として「豊かな人間性と確かな技術で、関わる人に、幸せや希望を提供できる人」を育成する人物像とし、専門学校として社会・業界に求められる人材の育成を進めている。

2. 前年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画

① 前年度重点施策振り返り

●主体的に学べる仕組み作り＝委員会の活用

コロナ禍における学校運営では、例年のような委員会や行事の運営が出来ない環境が続く中、保育発表会においては委員を中心として学生の主体性が発揮できるような意思決定、行事運営が出来ていた。

オープンキャンパス運営において、リーダーとなる学生が主体性を延ばし大きく成長する姿が見られた。その成長が 教務の中で好循環に繋がるので、2022 年度は行事等を通じてより多くの主体的に学べる仕組み作りを実施していきたい。

●学生の長所を見つけ・伸ばす仕組み作り

＝学生全員にスポットライトを当て長所を見つけ伸ばしていく(授業・行事)

担任教員中心に学生の長所を見つけ、声掛けするに留まり、授業・行事を通した仕組み作りまでには至らなかった。卒業生アンケートでは「本校で成長することができましたか」の問いに対し、下記の結果となっており、卒業生のほとんどが成長実感を得て卒業しているものの、介護福祉科に若干の課題が見えることが分かる。

【アンケート設問：本校で成長することが出来たか】

保育科	出来た	73.1%	どちらかと言えば出来た	26.9%	計	100%
介護福祉科	出来た	54.3%	どちらかと言えば出来た	34.8%	計	89.1%
全校平均	出来た	60.9%	どちらかと言えば出来た	34.9%	計	95.8%

●徹底した声掛け・連携＝授業後には必ず声掛けし情報共有を図る

担任教員から教科担当へ声掛けし情報共有を図る意識は醸成することが出来たが、全教職員それぞれの声掛けに個人差があることが課題。

教科担当教員の立場に立った情報発信や巻き込みをしていくことで、より一層の協力関係を図りたい。

●専門教育の充実と魅力的な授業展開＝担当授業のブラッシュアップ、教科会の活用、授業研究

教科会の際にカリキュラムマップを共有し、教科の関係性を明示することで教科間の連携を取りやすい環境にした。年に3回の全体会議の際に実施する教科会は、教務力向上の良い機会なので継続して 2022 年度も実施していきたい。

教科担当教員が授業見学をする機会を設けられなかったため、2022 年度については授業見学の機会を設け、授業力向上へ繋がる機会としたい。

介護福祉科、保育科共にテスト時期が授業によって異なっていたため、年間スケジュールにテスト期間を設定し、全教員周知の元、テストに集中出来る環境を整えた。

介護福祉科においては、より学科内での連携を強化するために教務主任がテストを回収・確認し、全教科で2週間に1回の小テストを実施する予定。また1年生よりタブレットが全授業導入されるため、タブレット導入にあたる研修も実施予定。

② 学校関係者評価委員会コメント

※次項目と共にご意見をいただく

3.評価項目の達成及び取組状況

(1)教育理念・目標

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
学校の理念・目的・育成人材像は定められているか（専門分野の特性が明確になっているか）	4
社会経済のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか	3
学校の理念・目的・育成人材像・特色・将来構想などが学生・保護者等に周知されているか	4
各学科の教育目標、育成人材像は、学科等に対応する業界のニーズに向けて方向づけられているか	3

①課題

・社会経済のニーズ等の情報収集をする場が主に年 2 回の教育課程編成委員会のみになっている

②今後の改善方策

・実習巡回や、就職先の訪問等、実習生、就職者のフォローだけでなく、社会経済のニーズ等の情報収集も目的に加え実施していく

・実習巡回等、普段の業務の中で何気なく収集している社会経済のニーズ等を集約し、全体で共有する場を設ける

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

- ・高校では、不登校を経験している生徒が多いこともあり、各自治体で出している教育白書を用いて不登校の推移を調べたり、直接中学校に訪問して聞き取りを行うなど、情報収集を行っている。（堤委員：介護福祉科・保育科について）
- ・当施設では、3年に一度作成される「介護保険事業計画」を参考に今後の介護の方向性や大枠をとらえるようにしている。そういったもので今後の方針や流れを知っておくと良いのではないかと。また、職場体験やボランティア受け入れなど、順次再開していく流れがあるので、そのような機会を活用して情報収集を行ってはいかがか。企業側も介護職を目指す方との接点を求めている。（松縄委員：介護福祉科について）

(2)学校運営

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
目的等に沿った運営方針が策定されているか	4
事業計画に沿った運営方針が策定されているか	3
運営組織や意思決定機能は、規則等において明確化されているか、有効に機能しているか	4
人事、給与に関する制度は整備されているか	4
教務・財務等の組織整備など意思決定システムは整備されているか	4
業界や地域社会等に対するコンプライアンス体制が整備されているか	4
教育活動に関する情報公開が適切になされているか	4
情報システム化等による業務の効率化が図られているか	3

①課題

- ・教育活動に関して、目標や課題、重点施策等は明確にしており、学校運営に関わる教職員にはしっかり周知できているが、学生に対して共有しきれていない部分がある

②今後の改善方策

- ・ホームルーム等で学生にも、本校の学生として目指してほしい到達点の共有をし、学生自身にも目標を意識した学校生活を送ってもらうようにする

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

- ・目標や課題の共有について当園では、職員会議の際に必ず目標を口に出して皆で確認している。繰り返し口にすることで、まずは言葉で覚え、次に意味を理解し、体に浸透していく。継続して確認することが大事。（上原委員：保育科について）
- ・保育需要が大きく変化している。保育施設の充足や出生率の低下がみられる中で今後、学生の就職先確保が難しくなることが予想される。そのような状況下で目標を共有しながら学生のモチベーションを維持していくことが課題（斉藤委員：保育科について）
- ・こども家庭庁の設置に伴い、今後医療的ケア児も普通学級に入ってくることが予想される。今後は障害を持った

こども達と共に遊ぶこと、ふれあう経験、そのようなカリキュラムを取り入れていくと良い(斉藤委員:保育科について)

- ・介護、保育共に外国人の採用が増えている中で、留学生や、社会人経験者など、様々な学生と共に学べる環境はとても良い(斉藤委員:介護福祉科・保育科について)

(3)教育活動

【評価項目】(評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1)	評価
教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針等が策定されているか	4
目標の設定として、教育理念、育成人材像や業界のニーズを踏まえた教育機関としての修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか	4
学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか	4
キャリア教育・実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などが実施されているか	3
関連分野の企業・関係施設等、業界団体等との連携により、カリキュラムの作成・見直し等が行われているか	3
関連分野における実践的な職業教育(産学連携によるインターンシップ、実技・実習等)が体系的に位置づけられているか	4
授業評価の実施・評価体制はあるか	4
職業に関する外部関係者からの評価を取り入れているか	4
成績評価・単位認定の基準は明確になっているか	4
資格(免許)取得の指導体制、カリキュラムの中での体系的な位置づけはあるか	4
人材育成目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保し、組織できているか	4
関連分野における業界等との連携において優れた教員(本務・兼務含め)の提供先を確保するなどマネジメントが行われているか	4
関連分野における先端的な知識・技能等を修得するための研修や教員の指導力育成など資質向上のための取組が行われているか	4
職員の能力開発のための研修等が行われているか	4

①課題

- ・時代の流れが加速している中、今まで以上に関連分野と連携することで、時代のニーズに合わせたカリキュラム作成・見直しが必要
- ・オンライン双方向授業やタブレット端末を使用した授業展開に力を入れていくので、教員のデジタルスキル向上が急務である

②今後の改善方策

- ・教育課程編成委員会の意見を参照したり、実習先へアンケート調査を行い今後の授業展開についてご意見をいただく

- ・教員向けのデジタルスキル向上研修を開催していく

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

- ・オンライン授業は自宅で受けるので、気持ちの保ち方が難しい。学びを止めないという点でオンライン双方向型授業は有効だが、やはり対面で行う授業のほうが知識が身につくという現状がある（島内委員：介護福祉科について）
- ・教員の工夫により、オンラインで制作を行う授業もあったが、やはり学校で友達と相談しながら行うほうが身についたので、対面で行う授業、オンラインで行う授業と並行して進めていけるのが理想（谷山委員：保育科について）
- ・日本語学校では、コロナ禍で学生が入国できないこともあり、ほぼオンライン授業で対応した。しかし、オンラインでは同時に話すことができないこと、話す際に周囲の反応が感じながら学ぶことが難しい。気軽に話ができないことで言葉の習得具合が低下してしまうと感じている。オンラインを活用してどれだけ多くの言葉を話させるか工夫が必要（平井委員：介護福祉科について）
- ・高校は、学校に来て対面で学ぶ楽しさ、大切さを感じてほしいと考えているので、あえてオンライン授業はあまり行っていない。ただ、ギガスクール構想のもと、小学生からプログラミングの授業を受けている子どもたちが今高校生になっており、間もなく専門に進学する。十分にタブレット教育を受けてきた子どもたちが進学してくることを意識しておいたほうが良い（堤委員：介護福祉科・保育科について）

(4)学修成果

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
就職率の向上が図られているか	3
資格（免許）取得率の向上が図られているか	3
退学率の低減が図られているか	3
卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	4
卒業後のキャリア形成への効果を把握し学校の教育活動の改善に活用されているか	4

①課題

- ・模擬試験を4回行うなど対策を行ってきたが、介護福祉科国家資格合格率が下がった
- ・実習に行き、業界には向いていないと感じ進路変更をする学生が例年より多かった

②今後の改善方策

- ・介護福祉科2年生は前期より国試対策の授業を4コマ増やし、国家試験の合格率向上に向けて取り組む
- ・記憶の定着を図るため2週間に1回小テストを実施していく
- ・定期試験の構成を知識の定着が図れるものにする（試験前にテスト問題を教科チーフが確認をする）
- ・退学率低減に向けて学生一人一人と面談を行い、保護者の方への電話掛けも実施し、早い段階で学生の変化に気づけるような取り組みを実施
- ・卒業生講話を行い業界への魅力を伝える

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

- ・留学生の日本語力の低下を感じている。タブレット端末の活用により、翻訳機能を使う学生が増え、日本語を使用する必要性が薄れている。日本語学校では、日本での生活や日本語習得において、まずはルールや単語を覚える事を重要視している。その後、覚えた言葉をいかに使うか、次の段階へと移行していく。定着度を測るテストも大事だが、ただテストをこなしていくだけでは意味がないので、Sanko Gate を活用しながら、スマートフォンやタブレット端末を使用し、ゲーム感覚で繰り返し単語を覚えられるようなシステムをとり入れていると良いのではないかと。（平井委員：介護福祉科について）
- ・実際に国家試験を受験し、もっと一年時から自己学習や振り返りをしておくべきだったと感じたので、2 週間に一度のテストはとて素晴らしい取り組みだと感じる。自身は、先生の励ましや声掛けのおかげで前を向けたが、学生の中には「とりあえず介護をやってみよう」といった気持ちで入学している者もいるので、気持ちを維持していくのが難しいのではないかと。（島内委員：介護福祉科について）
- ・資格対策の講師に、卒業生を含めると良いのではないかと。教員からの言葉と、卒業生からの言葉では、学生への響き方が違うと感じる。学生に近い存在で、同じ経験をしている先輩から国家試験の重要性を説いてもらえると良い。また、アクティブラーニングの教育を受けてきた子どもたちの中には、暗記科目に拒否反応を示すことが少なくない。その中で、学習の区分けやステージの区分けをすることも大事（堤委員：介護福祉科について）

(5)学生支援

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
進路・就職に関する支援体制は整備されているか	3
学生相談に関する体制は整備されているか	4
学生の経済的側面に対する支援体制は整備されているか	4
学生の健康管理を担う組織体制はあるか	4
課外活動に対する支援体制は整備されているか	4
学生の生活環境への支援は行われているか	4
保護者と適切に連携しているか	4
卒業生への支援体制はあるか	4
中途退学者への支援体制はあるか	3
社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか	4
高校・高等専修学校等との連携によるキャリア教育・職業教育の取組が行われているか	3

①課題

- ・就職サポートにおいて担任教員の比重が大きくなってしまっていたため、2022 年度は全体で学生のサポートをできる仕組み作りを行う

- ・就職後、人間関係に悩みすぐに退職してしまうケースが見られた

②今後の改善方策

- ・学生に対して就職担当者を決め、担任教員と2人体制でサポートをしていく
- ・昨年度教育課程編成委員会において、就職先とのマッチングについて「自己分析」を行ったほうが良いという意見をいただき、就職指導の授業で実施予定
- ・教育課程編成委員会において卒業生からの意見で、『早期退職を防ぐためにも、良い面だけでなくより現場に近い話を伺いたい。実際に働いてみて感じたことなどを、卒業生から在校生に伝えられる場を設けることができればギャップも埋まりやすくなるのではないか。』という意見があった。卒業生講話を設け、実際に働いてから社会人としてどんな困難があり、どう乗り越えたのかという話を聞く機会を設ける
- ・『企業分析』も行い自分にあう企業を見つけられるような就職指導を行う
- ・保育体験ができる園を、2021年度卒業生の就職先を選択することで卒業後のフォローも併せて行っていく

③特記事項

- ・保育体験とは、新入生を対象に実習への期待を高めるといふねらいのもとで行う現場体験のこと
- ・2022年7月11日(月)～14日(木)の期間で行う予定であり、早い段階で学生に保育現場の楽しさや子どもと関わることの面白さを体験してもらいたいと考えている

④ 学校関係者評価委員会コメント

- ・高校でも就職希望者には二人担当制でサポートをしている。高校と専門学校とでは、就職活動は異なるかもしれないが、二人担当制は良い取り組みではないだろうか。(堤委員:保育科・介護福祉科について)
- ・現在、保育士・保育施設が充足している状況であることから、今後保育士が余っていくことが予想される。その際に学生の就職のケアをしていく必要がある。保育士に限定することなく、広く選択肢を持てると良い。(上原委員:保育科について)
- ・保育の勉強＝人との関りを学ぶこと。心理学等も含めてこの学校で学んだこと、経験したことは、他の分野でも必ず役立つものである。選択肢を広く持ち保育に限定することなく、自分の強みを最大限活かして羽ばたいてほしい。(斉藤委員:保育科)

(6)教育環境

【評価項目】(評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1)	評価
施設・設備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか	4
学内外の実習施設、インターンシップ、海外研修等について十分な教育体制を整備しているか	3
防災・安全管理に対する体制は整備されているか	4

①課題

- ・コロナ禍における教室の環境設定改善を試みているが、今後の感染防止に向けてさらなる改善が無いか検討していく
- ・コロナ禍でのインターンシップ受け入れが充足していない状況

②今後の改善方策

- ・ワクチン接種の実施推奨、実習前のPCR検査の実施
- ・引き続き感染防止策の対応
- ・インターンシップ受け入れ先の拡大を行う

③特記事項

保育科に関しては、2022年度より教育実習の実習先として母園も可能とする

④学校関係者評価委員会コメント

- ・感染対策の徹底に関してはとても評価できるものであり、受け入れる側としても安心。コロナの状況に応じて、施設側もインターンシップの受け入れを行っていく(松縄委員：介護福祉科について)
- ・保育は場数を踏むことがとても大事。経験を重ねれば重ねるほど気持ちに余裕も出てくる。様々な現場に立つ環境が整うのは好ましい(上原委員：保育科について)

(7)学生の受入れ募集

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
学生募集活動は、適正に行われているか	4
学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	4
入学選考は、適性に行われているか	4
学納金は妥当なものとなっているか	4

①課題

- ・AO 内定後、合格通知後の辞退者が例年よりも多く出てしまった

②今後の改善方策

- ・合格者向けイベントを開催するなどして、入学に対する弊害があれば、早めに把握し、不安解消と学校生活への期待を高める機会を設定する
- ・定期的に学校とのつながりが持てるように仕掛けをつくる

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

- ・当方では内定辞退を防止する取り組みとして、内定後の接触機会を定期的に設けている。内定者懇談会や行事へのご案内など行い、顔を合わせる機会を保つていくと良い(松縄委員：保育科・介護福祉科について)
- ・自身の経験では、定期的に送られてくる広報誌が、企業の様子が見えて大変良かった。学校行事の様子や教員紹介などをメールでお知らせするのも学校との繋がりを切らさないために有効ではないか。(齊藤委員：介護福祉科について)

科・保育科について)

・日本語学校では、入国できない学生に対して、定期的にオンライン授業を行ったり、在校生とオンラインで繋いで入学を心待ちにしている旨呼びかける等対応した。対面でなくてもオンラインを活用して接触機会を増やすこともできる(平井委員:介護福祉科・保育科について)

(8)財務

【評価項目】(評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1)	評価
中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	4
予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4
財務について会計監査が適正に行われているか	4
財務情報公開の体制整備はできているか	4

①課題

【中長期計画】

特になし

【予算・収支計画】

特になし

【会計監査】

特になし

【財務情報の公開】

特になし

②今後の改善方法

【中期計画】

現在、第2次中期計画(2018 年度～2022 年度)の対象期間中であるが、当該計画を着実に実行すると共に今後は当該計画の公開に向けて着手していく予定である。

【財務情報の公開】

特になし

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

特になし

(9)法令等の遵守

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
関係法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	4
個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	4
自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	4
自己評価結果を公開しているか	4

①課題

特になし

②今後の改善方策

特になし

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

特になし

(10)社会貢献・地域貢献

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	4
学生のボランティア活動を奨励、支援しているか	3
地域に対する公開講座・教育訓練（公共職業訓練等を含む）の受託等を積極的に実施しているか	4

①課題

【保育科】

- ・月に1回みらいキッズを実施できたが、緊急事態宣言の期間など参加者の人数にばらつきがあった
- ・フードパントリーの実施会場になっているが、学生のボランティア活動が曖昧である

【介護福祉科】

- ・定期的にチャレンジド・ヨガを実施できたが、学生の積極性に欠けていた

②今後の改善方策

【保育科】

- ・みらいキッズの告知をばけっとランド綾瀬だけでなく、お世話になっている複数の保育園や区役所等に行い、地域貢献が活発になるようにする

・フードパントリーのボランティアを定期的に募集していく

【介護福祉科】

・チャレンジド・ヨガの告知を毎週行い、学生の興味や意欲が高まるようにする

③特記事項

【保育科】

・みらいキッズ：月に1回、地域の子どもたちを呼んで季節の行事、製作に親しめるよう学生が企画運営している活動

・フードパントリー：月に1回、フードパントリーの会場として、施設の貸し出しをしている

【介護福祉科】

・チャレンジド・ヨガ：土日に施設を貸し出し、視覚障がい者向けのヨガを実施しており、学生は利用者のサポートを行っている

④学校関係者評価委員会コメント

・イベントなどは、一度告知しただけでは継続は難しいのが現状。繰り返しご案内することで定着化されるのではないか（上原委員：保育科について）

・在学1年目はコロナの影響でイベントが開催されず、2年目でやっと参加できた。参加するまではイメージがぼんやりとしていて意欲がわかなかったが、参加してみるととてもやりがいを感じた。また、当日の運営だけでなく企画や準備の工程も経験できるので、責任実習の前に体験できて良かったと感じる。ぜひ在校生にも参加してほしい（谷山委員：保育科について）

・地域の町会会員の高齢化により、イベントを企画しても担い手がおらず、困っている自治会が多くある。そういったところと若い力を結び付けていくのはいかがか。（松縄委員：介護福祉科について）

(11)国際交流(必要に応じて)

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
留学生の受入れ・派遣について戦略を持って国際交流を行っているか	3
受入れ・派遣、在席管理等において適切な手続き等がとられているか	4
学習成果が国内外で評価される取組を行っているか	3
学内で適切な体制が整備されているか	3

①課題

【介護福祉科】

- ・日本語力が低く日本語フォローアップ授業のみでは対応が難しい
- ・授業の振り返りができておらず理解度が低く国家資格合格率は35.7%と半数以下となっている
- ・JLPT（日本語能力試験）の受験率が少なく動機付けがしっかりできていない
- ・在学中母国に帰省したいという意見が多数あり学校のみ判断は難しく、アルバイトと学校生活の両立が厳しい状況にある
- ・文化の違い・宗教関係により日本のルールが受け入れられないこともある（実習中に配慮が必要）
- ・タブレットの導入にあたり、翻訳機能の活用や文章の入力が容易になった部分もあるが、使用を

どこまで認めるか検討していく

②今後の改善方策

- ・留学生対象に週1回授業の振返りを実施
- ・国試対策は点数に応じグループ分けをし、個別指導に力を入れていく
- ・日本語フォローアップ担当教員と担任教員からのアプローチし、JLPTを全員受験することを目指す
- ・スポンサーとの連携を図り帰省の条件等を確認していき、帰省に適したな時期を精査する
アルバイトや介護実習に関して協力体制を強化し学習面と生活面の安定を図っていく
- ・学校生活上での身だしなみのルールを個別で伝え、理解に繋げる
- ・授業中等、指示があった時以外にスマホやタブレットを使用する時には教科担当に許可をもらうよう指導し、日本語に慣れてもらう必要性を同時に伝えていく

③特記事項

特になし

④学校関係者評価委員会コメント

- ・在学中、学校生活の中で日本とは違う言葉や習慣、考え方に触れられることで、とても良い刺激をもらった(島内委員：介護福祉科について)
- ・国家試験合格に向けて、早期から対策を取っているのは良い。今年度の合格率上昇に期待する。また、不合格者へ卒業後もフォローしていけるとよい(斉藤委員：介護福祉科について)
- ・オンデマンド配信等、卒業生にむけていつでも勉強できる環境を提供するのはいかがか。そういったサポート体制の構築が、入学希望にも繋がるのではないだろうか(堤委員：介護福祉科について)
- ・日本語学校では、各国版の学生ハンドブックを作成している。習慣や常識も日本と諸外国とでは異なるので、挨拶からトイレの使い方まで、細かく日本での生活様式を記載している。最初の段階で、日本での生活と自国の生活との違いを実感してもらうことが大事(平井委員：介護福祉科について)

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

学校の取り組みについて、学校関係評価委員会から概ね適切との評価をいただいた。

オンラインツールの活用に関して、学びを止めないという点や授業の効率化において有効であることが再確認できた。教員のデジタルスキルの向上や、授業内容の工夫をもって、より一層の充実を図っていく。また、授業以外の活用についてご意見をいただいたので、学生の自主学習や入学内定者との懇談会開催等、新たな取り組みを検討していきたい。

介護や保育の現場において、イベントの開催や学生の受け入れが少しずつ再開される兆しが見受けられた。積極的に外部との繋がりを構築しながら、学生の学びや経験を積む機会を設け、広く情報収集に努めていく。

また、刻一刻と変わっていく保育需要の現状と、今後に向けての対策を伺うことができたので、広い視野で学生への指導や、就職サポートにあたっていきたい。介護福祉科においては、国家試験への対策を強化しつつ、様々な現場を経験することで介護の楽しさを感じてもらいながらモチベーションの維持やサポートにあたっていく。